3. 大学2年生 －1958年－

春季リーグ戦

落ちる球

エースの吉田さんと原田さんが卒業し、いよいよ私たちの出番である。東大野球部に私を導いてくれた鈴木さんが主将となった。私はシーズン前に肩の調子が悪くなり、ストレートを思い切り投げられない状態で開幕を迎えた。やむを得ず、落ちる球を多投するしかない。このことが逆に私に幸いしたようであった。この球を投げてみると、ストレートよりもむしろ打たれないのである。この球は、高校時代に覚えたもので、スプリット・フィンガー・ファーストボールと最近呼ばれるようになった球である。人差し指と中指との間隔を少し広げてボールを持ち、ストレートとほぼ同じ感覚で投げればよい。私にとっては、楽に投げることができる球である。ただし、練習ではあまり投げてはいなかった。体のキレが悪くなることを恐れたからである。このシーズン当初、試合開始直後にはほとんどすべてこの落ちる球を投げた。そして、打者がこの球に慣れ始めると、徐々にストレートを多くしていったのである。

ストレートよりもわずかに遅く、かつ少し落ちるために、打者のタイミングをはずすのに有効であった。この落ちる球は、コーナーを狙って投げるのではなく、真中低目を狙って投げるのである。打者にとっては、打ち易く見えるので、最初は力を入れて打ってきた。打者の手元で少し落ちるので、ボールの上を叩くことになり、落ち具合によって、強いゴロになったり、弱いゴロになったりする。ファールボールや空振りとなることは少なく、野手の間にいけばヒットになるが、野手の守備範囲にとぶと凡打になる。特に、一塁に走者がいる時には、併殺になる可能性も高い。四球と三振の両方ともに少なくなり、投球数も少なくてすむ。全力で投げる訳でもないので、疲れも少ないという利点もある。思い切り投げられなかったことが、この球の有効性を私に教えてくれたのである。

私の特徴のひとつは、捕手からの球を受けとると、すぐにモーションに移ることであった。捕手からの返球を受け取り、打者を見ると、次に投げる球が浮かび、それ以外の球を投げる気がしないのである。100球の内、90球はひとつしか浮かばない。10球ほどはふたつ浮かぶが、その場合には捕手のサイン通り投げればよい。90球の内、捕手からのサインが気に入らないのは10球ほどであるから、ほとんどの場合、すぐ投げることができたのである。サインが気に入らない場合は首を横に振ると、大抵次は私の投げたい球のサインをだしてくれた。大学時代の高橋捕手や中学・高校時代の小川捕手の場合である。

初勝利 －対早大１回戦－

このシーズンは立大の10勝無敗の優勝で終わった。その立教に開幕戦に当たり、２対０、５対０と簡単に連敗した。私は一応無失点には抑えることができたが、２試合ともに勝負が決まってから救援した、いわゆる敗戦処理であった。

次の対戦相手は、３位に終わる早大であった。この試合が観衆二万五千人の見守る中での私の初勝

利となる。５回途中から先発の本多投手を救援した。６回には二塁打を浴びたのち、２つの犠打で１点をリードされたが、七回に片桐が右中間を破り、高橋のバントとスクイズで同点とし、延長戦となった。延長11回表、相手の悪送球から芽生えた好機に、バントで送ったあと、坪田三塁手がカーブを中堅左に痛打して１点、さらに渡辺一塁手の２ゴロ失のあと、片桐の右中間二塁打で２点を追加、５対２で勝ったのである。

11回裏は、リーグ戦で初めてリードしたインニングであった。この回を押さえれば勝ちという私にとって初めてのチャンスでもあった。リードが３点もあったので、大丈夫勝てると言い聞かせながら投げた。それでも緊張していたらしく、先頭打者を四球で出した。幸運にも次の打者の当たりが一塁ライナーで併殺となった。最後の打者４番徳武(後に、プロ野球で活躍、監督にもなる)の三振は、この試合で投げた初めての上からのカーブを見逃したものである。この時は、まだ、時には上からも投げていた。おそらくこの時が最後で、以後下手投げに徹したはずである。

「岡村は下手から落ちる球を武器に、徹底して低目をついたのが成功した。それにしても早稲田の打力はお粗末だった。わずか４安打、クリンアップトリオに１本の安打もなく、とりたてていうべき球威のない岡村に好投を許したのは情けなかった」これが有本さんの評である。「東大は本多、岡村とも球勢、コントロールともに全くの上出来」という河合君次さんの評や、「岡村は荒れ気味だったが、外角に浮く球と内角に落ちるシュートで早稲田打線を封じた」という塚本さんの評などが新聞に載った。同じ投球を見ても、このように評価が異なるのであった。、この日の私の投球が理解しにくい内容であった証拠でもある。私自身もよく覚えてはいないが、その試合、私は７回を投げ、被安打２、与四死球４と被安打よりも与四死球が多い所を見ると、ストレートが良い方のパターンであったようだ。与四死球が少ないのが、落ちる球を主体とした時の特徴であった。

２回戦は、９対２の敗戦であった。この試合には登板していない。このシーズン初めてのことである。そして、決勝戦に臨んだ。２回、３連続四球で無死満塁となったところで、本多投手を救援した。初球か二球目を連続単打され、気がついたら７点を取られていた。結局12対１での惨敗であった。このようなケースでの救援は初めてであり、多少準備が遅れたかもしれないし、前の投手との関係でストライクを投げようとしすぎたかもしれない。私は、コントロールの良い日もあるが、コントロールがままならない日もある。後者の場合、常に四球を出す不安と戦いながら投げるのである。

ついで、２位に終わる慶大相手に、７対０、２対０と簡単に連敗した。１回戦はリリーフで登板したが、２回戦は登板していない。そのシーズン２度目の試合である。これ以後の試合はすべてに登板することになる。

幸運の２勝目 －対明大１回戦－

次の対戦相手は明大であった。１回戦は、３回表３点取られてなお走者を置いた状況で本多投手を救援した。その初球を打たれて追加点を挙げられ、さらに７回には守備の乱れで２点を追加された。７回表を終わって７対３と４点もリードされたのである。解説の片桐先輩(片桐の父親)が今日は東大の負け、と言ってテレビの放送が終わった。当時は六大学野球全ての試合を全国放映していた。投げていた私もこれで駄目だと観念した。ところが、その裏に４点を取って、同点としてくれたのである。

そして、８回には、１死後国武捕手が左前安打に出ると私がバントで送り、２死ながら勝ち越しのランナーを二塁に送った。これに、塚田投手は動揺したか、１番の鈴木さんを歩かせ、２番の佐々木

さんにも初球に死球を与えて、満塁の走者を残して降板した。つづく３番片桐は、リリーフに立った岩井投手(甲子園の優勝投手)の２球目を、左中間に走者一掃の二塁打を放ち、勝ち越しの３点を挙げた。この試合もリードしたのは９回表だけであった。しかも３点である。１勝目を挙げた時と同じパターンであり、これならば勝ちきるのもそれほど難しくはない。私にとっては幸運な**２勝目**であった。

初先発(初完投･初勝点) －対明大２回戦－

対明大２回戦は、私にとって、**初先発**、**初完投**、**初勝点**となる記念すべき試合となった。２回裏に２点を先取されたが、７回に１点を取り、８回表に池田投手(後に広島カープで活躍)をKOする２点をとって逆転した。ところがその裏に、佐々木選手に中堅越え二塁打を打たれ、せっかくのリードをふいにした。リードした試合での初失点である。しかもそれが同点である。９回表、簡単に２死をとられたあと私に打順が回ってきた。いつもであれば、このようなケースでは三振して投球に専念するが，その時は同点にされて頭に血が昇っていた。必死になって打ちに行き、ライト前にヒットを打った。日頃２ストライクまではバットを振らずに見逃していたのが、このような時に役立ったのである。私の打席では、１球目は打ち易い球を投げてくるようになっていた。１番鈴木二塁手、２番佐々木中堅手もヒットで続いた。３番片桐がここで右前に快打して貴重な１点を挙げ、これが決勝点となる。

９回裏、先頭打者に死球を与え、しかも二盗に成功された。次打者の１ゴロで三進、１死三塁と一打同点のピンチを招くが、代打がスリーバントを失敗してくれた。最後の打者の遊ゴロを片桐が慎重にさばき、薄氷ながらも連勝して勝点をあげることができた。このような場合に最も信頼できるのが彼である。被安打４、与四死球３、自責点１であったのをみれば、落ちる球が良かった日と思われる。

「東大の勝因はあくまでも岡村が下手投げから外角にホップする球と、たんねんにコーナーをつく巧みなピッチングに明治打線の集中打を封じきったことにあった」と有本さんは評してくれた。「ヒーローなんてとんでもない。２回の失点も８回の同点にされる糸口もみんな私がつくってしまった。だからあそこで逆転打を打ったって威張れませんよ。しかしこれでなんとか汚名をすすげたのでほっとしました。打った球は外角低目のストレートでした」と記者団の質問に対して片桐選手は嬉しそうにグローブをたたいていたと新聞には報じられた。なお、東大が対明大戦に連勝を記録したのは1932年春以来26年ぶり、それ以外の連勝は1949年秋の対立大戦に記録して以来のことであった。

初の敗戦投手 －対法大１回戦―

このシーズン最後の相手は法大であった。その１回戦が、私にとって２度目の先発であり、そして初の敗戦投手となる試合となった。１回表に１点を貰いながら、２･６･８回にそれぞれ１点ずつとられ、結局３対１で負ける。６回は死球と四球で２死ながら一・三塁。ここで、４番左打者の山本(後に広島カープで活躍、監督にもなる)に左中間を抜かれた。被安打４、与四死球７、自責点３であった。この日のように、ストレートに球威がある時は、与四死球が多いのが私の特徴である。本来ならば、左の強打者４番山本を敬遠して満塁とし、次打者と勝負すべきであったが、このコントロールでは押し出す可能性が高く、その策をとれなかったようだ。

２試合連続完投 －対法大２回戦―

次の２回戦は、初めての２試合連続完投の試合となった。新聞には、「この試合を失うと最下位が

決定する東大は体力的に難のある岡村を敢えて連投させて背水の陣を布いた。しかし懸念されたバックの守備陣が３回までに致命的な失点の要素をつくり、矢部の本塁打に始まる後半の反撃も空しく連敗を喫した」とある。２回、３回に１点づつとられ、５回に１点を返したが、９回に１点を取られて、３対１での敗戦。被安打９、与四死球３、自責点１であった。連投のせいか、球に威力がなく、その分コントロールは良かったのであろう。このような場合、ヒットを打たれるわりに点は取られない。渡辺監督談に、「まさか岡村が２試合完投するとは思わなかった。気力で投げたのだ。バックが彼をもりたててやらなければいけないのに、前半動きが悪く残念なことをした」とある。私としては、当時の実力ではこれが精一杯であり、ある程度の満足感はあった。

昭和33年春季リーグ戦の記録

東大は、結局３勝８敗で最下位に終わった。各校の成績と順位は以下に示すように、立大の完全優勝であった。このシーズンの私の投手記録を総括すると、９試合に登板し、そのうち完投は３、**３勝２敗**であった。69インニングを投げ、被安打59(7.7)、奪三振18(2.3)、与四死球20(2.6)、失点27(3.5)、自責点20 (2.6)、被盗塁６ (0.8)であった。なお、( )内の数字は１試合当たりの値である。以下に記録を記す。

優勝	立大	１０勝０敗	５勝点
２位	慶大	７勝５敗	3
３位	早大	６勝６敗	3
４位	法大	５勝７敗	2
５位	明大	４勝９敗	1
６位	東大	３勝８敗	1

対立教

１回戦	（４月12日）	東大	０００	０００	０００	0
	（本多、岡村）	立大	００２	０００	００X	2
２回戦	（４月14日）	立大	４００	１００	０００	5
	（樋爪、岡村）	東大	０００	０００	０００	0

対早稲田

１回戦	**（４月19日）初勝利**	**東大**	**００１**	**０００**	**１００**	**０３**	**5**
	（本多、岡村）	**早大**	**００１**	**００１**	**０００**	**００**	**2**

延長11回、清水の悪送球から芽生えた好機に、酒井が送ったあと、坪田が２－０と追いこまれながら４球目高いカーブを鮮やかに中堅左に痛打し、さらに渡辺の２ゴロ失、片桐の右中間二塁打で勝利決定の３点をあげ早稲田を破った。東大は３回、内野安打に出た辻を、佐々木のバントと本多の三越安打で迎い入れ、今季21インニング目の得点をあげて、意気高いものがあった。しかし、この裏本多が無死奥村を歩かせたのがたたって、安打と内野ゴロでたちまち同点とされ、逆に６回にはリリーフの岡村が木賀沢に二塁打を浴び、２つの犠打でアヘッドされた。こうなっては力のない東大にとって勝機は求められぬとさえ思われた。しかし、迎えた７回、片桐が右中間を破り、高橋のバントと辻の２－３からのスクイズで再び試合を振り出しに戻した。岡村、奥村がその後よく投げたので、延長に入っても均衡は破れそうになく、時間切れの引き分けさえ予想できた。ところが11回、東

大は敵失から一挙３点をあげて早大に苦汁をなめさした。本多を思い切りよく見限って岡村をリリーフに送った継投が図に当たり、岡村は下手から落ちる球を武器に徹底して低目をついたのが成功した。

２回戦（４月20日）	早大	２００	０１３	２１０	９
（近藤、樋爪、滝川、本田、飯島）	東大	０００	０１１	０００	２
３回戦（４月21日）	東大	００１	０００	０００	１
（本多、岡村）	早大	０７０	０１０	１３Ｘ	１２

対慶應

１回戦（５月３日）	東大	０００	０００	０００	０
（本多、岡村、樋爪）	慶大	０００	４１０	２０Ｘ	７
２回戦（５月４日）	慶大	０００	０００	０２０	２
（本多、樋爪）	東大	０００	０００	０００	０

対明治

１回戦（５月10日）２勝目	**明大**	**１０４**	**０００**	**２００**	**７**
（本多、岡村）	**東大**	**００２**	**１００**	**４３Ｘ**	**１０**

東大は３回の失点に屈せず、岡村をリリーフに送ったベンチの果敢な策と、それに答えた岡村の好投、そして14安打を放った打力で、堂々明大に逆転勝ちした。７回同点に追いついた東大は、８回１死後国武が左前安打に出ると、岡村に手堅くバントさせて二塁に送った。２死ながらウイニングランを２塁におかれ、塚田は動揺して鈴木を歩かせ、佐々木にも初球死球を与え、満塁の走者を残して降板した。つづく片桐はリリーフに立った岩井の２球目内角球を左中間に走者一掃の２塁打して勝ち越しの三点を挙げた。明大は、３回田島の四球からチャンスをつかみ、山地とのエンドランが成功して一・三塁、１死後長島の左犠飛で１点、なおも川添の安打と浦井の死球で２死満塁から、久米のタイムリーがでて本多を降し、代わった岡村の初球を池田も叩いてこの回打者10人で一挙４点をあげた。そして７回には、東大内野陣の乱れに乗じて２点を加え、安全圏に逃げ込んだと思われたが、思わぬ投手陣の不振で、最終回代打、代走を繰り出す人海戦術も空しく、苦杯を喫した。岡村は代わりばな好球をそろえて打たれたが、順次調子を取り戻して、下手から外角低目に入る直球とカーブを巧みにまじえて、明大を押さえ、７回味方の３失策による失点にも落胆せず奮闘した。

２回戦（５月13日）３勝目	**東大**	**０００**	**０００**	**１２１**	**４**
（岡村）	**明大**	**０２０**	**０００**	**０１０**	**３**

東大は明治に自信を持っている。昨春は見事最下位返上の勝ち点を握れば、今春もまたまたストレート勝ちを演じて、明治を優勝戦線から引きずり落す大殊勲をたてた。東大の勝因は、あくまでも岡村が下手投げから外角にホップする球、とたんねんにコーナーをつく巧みなピッチングに明治打線の集中打を封じきったことにあった。東大は、２回長島の長打と遊撃片桐の拙い守備にこの日も立上りから苦しい試合運びだったが、好投の岡村に助けられた打線は、７回無死で渡辺が右翼線に二塁打、坪田は右前にたたいて点差をつめ、８回は１死後鈴木、佐々木が連打、片桐が手堅く送ったあと、渡辺も四球で２死ながら満塁という絶好の反撃機をつかんだ。そして坪田は１－０後外角高めの球を右前にうまく会わせて２走者を迎え入れて一挙逆転、池田をKOした。しかし、その裏、遊撃片桐３度の失策から同点に追いつかれはしたが、一時逆転し、気をよくした東大は、最終回簡単に２死をとられたあと、岡村が右前打、鈴木が中前打、これに続く佐々木も遊撃内野安打にフルベースとリリーフの岩本に迫り、片桐が２－１後外角低目球をすくうように右前に快打して岡村を迎え入れて、決勝点とした。明治は、２回２点を先制したときは、総合力に優る明治の雪辱がと思われた。しかし、岡村の下手投げに打線がタイミングを狂わされ、５、６回の１死二塁の追加得点機を後続打がなく逸し、後半エース池田が打ちこまれるに及んで、ややナインは浮き足立ったが、８回佐々木の中堅オーバー二塁打で同点に持ちこみ、最終回代打沖田死球二盗成功、久米の１ゴロで三進、１死三塁と一打同点のチャンスをも

ったが、代打山地がスリーバント失敗、さらに唐沢も遊ゴロに倒れてついに連敗を喫し、争覇戦線から脱落した。

対法政

1回戦（6月2日）**初の敗戦投手**	東大	100	000	000		1
（岡村）	法大	010	001	10X		3

6回に死球と四球で2死ながら一・三塁とピンチに立ったとき、東大渡辺監督はマウンドへ歩みよって岡村の調子を打診していた。これで2度目、岡村は調子の悪くないことを告げ、続投となった。岡村はそれまで1点はとられていたが、安打を2本で、交代には難しいところだったが、山本に1－2と追い込まれたあと、外角のシュートを左中間へ叩かれて逆転された。

2回戦（6月3日）2敗目	法大	011	000	001		3
（岡村）	東大	000	010	000		1

秋季リーグ戦

2年生秋は、私の東大野球部生活で最もチームの成績が良かったシーズンである。順位こそ最下位に終わったが、16試合を戦って、**5勝9敗2分で勝ち点1**を挙げた。ほとんどすべての試合がが互角であった。このシーズン、私は東大の16試合中14試合に登板して、完投は7試合。**4勝7敗**の成績であった。

会心の勝利　－対慶大2回戦－

開幕戦の対慶大1回戦は2対2の引き分けに終わった。この試合は、私が先発し、9回2死まで1対0とリードされたが、幸運にも相手の連失によって2点を得て逆転した。9回表の攻撃で私に代打が出て、本多投手が登板した。私に代打を出したことを渡辺監督は後悔したそうである。リードした試合をベンチで見るのは、2年生になってからでは初めてであった。1死走者二塁で、安藤(阪神で活躍、監督にも就任)の打球は右前へ、辻右翼手は思い切り前進するも及ばず、ボールは転々とフェンス際に転がった。その時、鈴木二塁手(主将)は自らフエンスまで拾いに行って、好返球を返し、安藤を本塁寸前でアウトにし、引き分けに持ち込んだのである。

対慶応2回戦は、1回裏に得た3点を守りきるという私にとっての会心の勝利であった。立ち上がりからスピード、コントロールとも満点のでき。1年に1回位しかない好調さであった。ストレートを中心として完投した初めての試合といえる。中盤から後半にかけては、翌日以降の試合を考えることなく、この試合にさえ勝てば良いと、全力でストレートを投げ続けた。被安打6本とわりあいに多いが、与四球が1と私としては全く後悔するところのない、会心のピッチングであった。相田主審の試合後のコメントは、「なんといってもコントロールが良かったことが第一だ。出だしは高めへ浮く球で外角をつき、中盤ごろからはこれをインコースに集中して変化をもたせ、さらに外角を決め球にしていた。後半は、さすがに疲れたようだが、巧く散らして成功した。2回に1点とられたときは高めへ浮く球がいいところへ入ってしまったものだ」である。さすがに良く見てはおられる。立ち上がりはインコースへの伸びるシュートボールがコースいっぱいに決まって、慶大としては初めてみる私

の好調さに戸惑ったようであった。中盤から後半にかけては、コントロールよりもむしろ球威に重点をおいて投げ、荒れ気味の投球となったのがかえって功を奏した。この勝利は、東大にとって、慶応から挙げた９年ぶりの勝ち星であった。

３回戦は９対１、４回戦は８対０と惨敗した。３回戦は投げていないが、４回戦は１回表に５点も取られる憂き目にあった。２回戦に、全力で直球を投げ続けた疲れもあって、中１日ではやや球威が不足した上に、コントロールにも多少の問題があったようである。

３試合連続完投 －対明大戦－

次の対明大１回戦にも接戦を制して、延長10回、４対３で先勝できた。この試合は、１対１の同点の８回表、無死で私が四球、鈴木さんのバント安打の後、１死一・二塁から、片桐の走者一掃の三塁打で２点を勝ち越した。情けないことに、８回裏・９回裏と１点ずつ取られての延長戦である。特に、９回は先頭打者に死球という悪いくせが出ての同点であった。10回表の攻撃は、私が先頭打者であった。必死の思いで出塁した。この試合、私の得た３個目の四球である。バントで送られた後、２番佐々木さんのヒットで生還して４点目、ホッとした。10回裏の守りを全く覚えていないのは特別なことがなかったからか、翌日以降の印象が強く、それに消されてしまったのか。10回を投げ、被安打５、与死四球３、自責点２。完投勝利であった。その日の新聞記事の一節は以下のようなものであった。

今シーズン第２週の対慶大１回戦に引き分けた後、２回戦を岡村の好投でモノにして先勝している東大が、今度は明大に先勝した。しかし、試合後のベンチは慶大を破ったときのように興奮してはいなかった。**渡辺監督**は「もしウチが勝ち点をあげるとすれば、この明大戦だとファイトを燃やしていた。岡村が良く投げ、そしてチャンスメーカーとして働いてくれた。それと片桐、佐々木とタイムリーに打ってくれたが、みんなのファイトのあらわれだ」といっていた。３人のヒーローにきいてみよう。**岡村**「慶大戦のあと試験や雨でピッチングをやったのは３日ほど。球が思うように変化しなかったのでとても苦しかった。苦手の左打者久米さんをマークしたが、それでもタイムリーされてしまった。とにかく慶大戦のときの方がずっと調子は良かった」。これで、岡村は今シーズン２勝１敗。その２勝はともに完投勝利である。**佐々木**「ベルトあたりに曲がり込んでくるカーブだった。カーブで攻めてくるとは思ったが…」。佐々木は今シーズン22打席目に打った初安打が三遊間を抜いて決勝点をたたき出した。**片桐**「練習では全然当たらないのに神宮へくるく不思議にヒットが出る。自信のある高目にきたので３本も打てた」。そのうち２本がタイムリーで一人で３打点。そして22打数11安打、打率が５割にあがってベストテンのトップに躍り出た。

次の試合も先発完投であった。以下は新聞の記事である。

連勝を狙って東大は岡村が投げた。前日10回を投げ切った岡村の立ち上がりは苦しそう。スピードもなく、コントロールも思うようにならない。１回は四球と岩井に打たれた２死一・三塁。２回も併殺で逃げたが、１安打１四球、３回は無死で川添に足元を抜かれている。ところが明大はこの岡村を攻略できない。ボールになるシュートを無造作に打って自らチャンスの芽をつぶしていった。中盤は岡村が立ち直り、３人づつ。８回明大は１死後川添、山地の連安打と岩井の死球で１死満塁。佐々木の１－１からの３球目、三塁走者の川添が走り、佐々木がバットを突き出してスクイズ。しかし、東大バッテリーにうまく高く外

角へ逃げるカーブでかわされ、川添は三本間でアウト。その裏東大も岡村、佐々木の連安打、片桐の３塁ゴロ併殺くずれでつかんだ２死一・三塁を代わった投手光沢（飯田長姫高校のとき甲子園で大活躍し小さな大投手と呼ばれた）の第１球片桐が二盗に失敗して得点にならない。最終回、岡村はトップ久米に死球、庵野にはストレートの四球、浦井にぶっつけて無死満塁。漆畑の２ゴロで走者をホームに刺したものの光沢に内角球を強引に右翼線に引張られて２者が生還した。勝負はこれで決まったが、明大はなお１点を追加した。

結局３対０での敗戦。リーグ戦４敗目である。被安打７、与死四球６、自責点３であった。与死四球５が立ちあがりの２回と最終回に集中している。これが私の悪い癖である。

次の試合も完投であった。３試合連続完投は後にも先にもこれだけである。１対１の同点から、９回裏に１点をとられてのサヨナラ負け。９回裏、１死から遊ゴロ失に出た岩井にデレードスチールをされた。これは一塁に牽制をし、刺したと思ったが、そのまま走られセーフとしてしまったものである。２死後佐々木にサヨナラヒットを打たれてしまった。この打者を迎えて、次の打者と共に四球を出して満塁にしても良いと判断した。しかし、あっさりと歩かすのはもったいないと思い、くさいところをついて、手を出してくれれば儲けものと、アウトコースをはずすカーブを投げた。身を乗り出すようにして、これを打たれたのである。判断ミスであった。あっさりと敬遠しておくべきであったのだ。勝負をするならば、真っ向勝負をしていなければならなかった。そのことが悔やまれて、試合後も涙が止まらなかった。私の野球生活で初めてのことである。この試合、被安打５、与死四球１、自責点１であった。

早大に初の勝点　－対早大戦－

次の対戦は早大であった。１回戦は樋爪投手が完投し、６対１での敗戦。２回戦は私の完投で６対３の楽勝。この試合は、珍しく、金沢、安藤を打ち込んで、４回までに11安打で６点をとってくれた。５回以降は、翌日のことも考えながら省エネ投球をした。真ん中低めに緩く落ちるボールを多投したのである。被安打９ながら与死四球０であった。あまり疲れることなく完投できたが、これが問題を残してしまった。打ち易い球を多く投げた結果、相手打者に無用な自信を与えたのである。これが次の試合に悪影響を与えることになった。

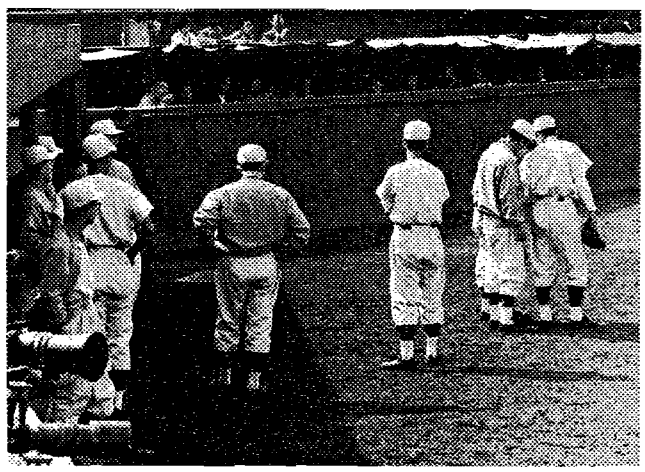
このシーズン対戦した三校に対して、いずれも決勝戦に持ち込んだことになる。決勝戦は１週間後の５月15日に行われた。この試合にも先発したが、例によって立ち上がりが悪い。１番近藤（昭）に死球、２番にバントで送られた後、三盗された。そして、３番徳武に三遊間を破られて１点を献上。しかも、彼にも盗塁された後、４番近藤（晴）に二塁打を打たれて、わずか10球で２点を先取された。いつもの女房役高橋が右小指骨折のため、国武先輩に代わっていたのも配球に微妙に影響していたかもしれない。２回に１点を返すも、５回には先頭木次を右翼手の落球で二塁に出した後、２つの犠打で１点を追加された。７回表に１点を返して１点差とするも、その裏、所、木次に連続二塁打を打たれて１点を与え、またも２点差となった。次打者に四球を出したところで、樋爪と交代。ここで、樋爪が踏ん張り、以後を０点に抑えた。そして８回、先頭の４番渡辺一塁手が四球、５番坪田三塁手の三塁線内野安打で無死一・二塁とした。続く２人が凡退して２死となった後、国武捕手の二塁打が出て１点をとり、なお二・三塁のチャンスに、樋爪自らが一塁頭上をふらふらと越す２点適時打を放って

逆転した。樋爪は３回を無安打、無四球の好投で抑えきって５対４で初勝利を挙げた。私にとっては、主戦投手になってベンチで勝利を迎える初めての試合となる。この勝利は、東大がリーグ加盟後最も苦手としていた早大に対する10勝目であり、初の勝点でもあった。

無念の敗戦　ー対立大戦ー

この３日後に立大と対戦した。１回戦は完投するも３対０の敗戦。１回裏に１点、８回裏に２点を奪われた。私は比較的調子が良く、被安打は４にすぎなかった。

続く２回戦も３対１で破れ、このシーズン初めての連敗を喫した。立大はこのシーズン９勝４敗で優勝したが、これは我々のせいである。この試合、１回裏に１点を先取し、前日よりも好調であった。そこで、３回に先頭打者になったとき、もう１点とれば確実に勝てると思って出塁を試みた。２ストライク後、絶対にカーブが来ると読んで待っていると、案の定、インコースに来た。投手はコントロールに定評のある森滝投手である。彼は後日プロ野球に入り完全試合をなし遂げている。しめたと思い、バットを振ろうとした。ところがなんと体に向かって逆に曲がってくるではないか。途中で振るのをやめたが、球は私の右腕に当たった(**写真**)。この時、私は森滝投手が私を狙って投げたと信じた。右腕の痛さと悔しさとで涙が出てきた。そして、死球だと思い、一塁に歩こうとした。しかし、主審は三振だという。それで、一層腹が立ってきた。４回からは腕が痛くて、カーブもまた速い球も投げられない。ひたすら落ちる緩いボールを悔し泣きしながら投げ続けた。森滝投手はその時の私を一生忘れられないと最近人づてに聞いた。記録を調べてみると、彼には代打が出て交代している。いつか真相を聞いてみたいものだ。



森滝投手からの死球

どうにか６回を終了するまでは０点に抑えることができた。泣きながら投げているのだから、相手もやりにくかったと思う。しかし、ついに７回につかまり、無死満塁のピンチを招いた。ここで、投手交代のため、渡辺監督がマウンドへ来た。誰が投げるのですかと私が聞くと，樋爪だという。彼は長身で上から投げ下ろすタイプの投手で、小柄な打者はどちらかというと苦手である。打者は小柄な１番打者浜中選手(後にプロでも活躍)であった。この打者だけは、私の方が良くは有りませんかと私が言うと、それもそうだと監督はあっさりベンチに帰られた。ところが、ここでヒットを打たれてしまい、２点を失った。私も未練なく、マウンドを降りた。結局この回３点を奪われ、３対１で連敗した。落ちついてから考えると、ストレートもカーブも投げられなくて、最後まで抑えられるはずがない。意地だけでは勝てるはずがない。もっと早く樋爪にこの試合を託すべきであった。この試合に負けたことが、このシーズン最下位となる運命を我々にもたらした。

４連戦 －対法大戦－

１回戦は８回まで投げて４対０の敗戦。このシーズン防御率０点台で絶好調の牧野投手に完封されたのである。

２回戦は、樋爪、岡村の継投で延長10回１対１の引き分けに終わった。相手は牧野投手の連続完投である。この試合、１回表に１点を先取、樋爪の好投で８回までリードを保った。私はブルペンでいつでも登板できるように早くから準備をしていた。８回裏、１死一・三塁でようやく私の出番である。ブルペンでの調子は今一つで、ストレートが走らなかった。そこで落ちる球で三塁ゴロの併殺に討ち取る以外に、このピンチを逃れる策はないと思い、マウンドへ向かった。まさに作戦図に当り、三塁ゴロである。坪田三塁手は軽くさばいて鈴木二塁手へ。続いて一塁へ渡り、併殺と思った瞬間、球は渡辺一塁手の頭上を越えていた。名手鈴木が初めて見せた悪送球であった。一塁走者が両手を挙げて走って来たのを避けようとしたためである。敵も必死であった。

３回戦は、１対１同点の７回裏に、先頭の片桐四球、バントで二進、坪田四球の一・二塁に、６番矢部選手が四球の後の初球を定石どおりたたいて２者を還す二塁打を放った。３対１の快勝で決勝戦に持ちこむことができた。私は被安打４の完投であった。

決勝戦、相手牧野投手はこのカード３度目の登板、私は４度目である。牧野投手がいなければ法大よりも東大の方が強い、という印象を我々は持つことが出来た。しかし、現実には、私と牧野投手との差が勝負を決めた。この試合は一度もリードすることなく、３対２で敗れた。最後は樋爪の救援を仰いだのである。

早慶戦が慶大の２勝１敗以外であれば、そのどちらかが最下位となるはずであった。しかし皮肉にも、慶大の２勝１敗に終わり、このシーズンも我々は最下位に甘んじることになった。波瀾に富む、思い出深いシーズンではあった。

昭和33年秋季リーグ戦の記録

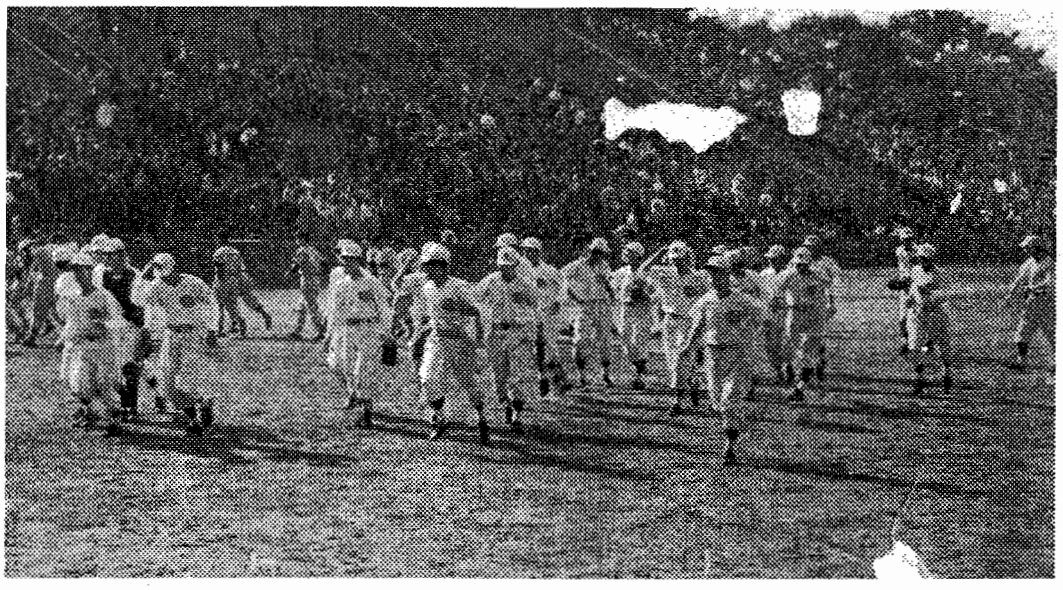
私の東大野球部生活で最もチームの成績が良かったシーズンである。順位こそ最下位に終わったが、16試合を戦って、**５勝９敗２分で勝ち点１**を挙げた。ほとんどすべての試合が互角であった。このシーズン私は、東大の16試合中14試合に登板して、完投は７試合。**４勝７敗**の成績であった。通算で７勝９敗となった。各校の成績と順位は以下に示すように、立大の４連覇であった。

優勝	立大	９勝４敗１分	４勝点
２位	法大	８勝６敗３分	４
３位	明大	７勝５敗１分	３
４位	慶大	６勝４敗４分	２
５位	早大	５勝８敗３分	１
６位	東大	５勝９敗２分	１

対慶應

１回戦（９月13日）	東大	０００	０００	００２	２
（樋爪、岡村、本多）	慶大	０００	００１	００１	２

２回戦（９月14日）４勝目	**慶大**	**０１０ ０００ ０００**	**１**
（岡村）	**東大**	**３０１ ０００ ００Ｘ**	**４**
３回戦（９月15日）	東大	０００ ０１０ ０００	１
（樋爪、本多）	慶大	０２１ ２０２ ２０Ｘ	９
４回戦（９月16日）３敗目	慶大	５００ ０１０ ２００	８
（岡村、樋爪）	東大	０００ ０００ ０００	０
対明治			
１回戦（９月27日）５勝目	**東大**	**０００ ００１ ０２０ １**	**４**
（岡村）	**明大**	**０００ １００ ０１１ ０**	**３**
２回戦（９月28日）４敗目	明大	０００ ０００ ００３	３
（岡村）	東大	０００ ０００ ０００	０
３回戦（９月29日）５敗目	東大	０００ ０００ １００	１
（岡村）	明大	１００ ０００ ００１	２
対早稲田			
１回戦（10月４日）	東大	０００ ００１ ０００	１
（樋爪）	早大	３０３ ０００ ００Ｘ	６
２回戦（10月８日）６勝目	**早大**	**０００ １００ ００２**	**３**
（岡村）	**東大**	**０１３ ２００ ００Ｘ**	**６**
３回戦（10月15日）	**東大**	**０１０ ０００ １３０**	**５**
（岡村、樋爪）	**早大**	**２００ ０１０ １００**	**４**
対立教			
１回戦（10月11日）６敗目	東大	０００ ０００ ０００	０
（岡村）	立大	１００ ０００ ０２Ｘ	３
２回戦（10月12日）７敗目	立大	０００ ０００ ３００	３
（岡村、樋爪）	東大	１００ ０００ ０００	１
対法政			
１回戦（10月19日）８敗目	法大	０２０ １００ ００１	４
（岡村、樋爪）	東大	０００ ０００ ０００	０
２回戦（10月20日）	東大	１００ ０００ ０００ ０	１
（樋爪、岡村）	法大	０００ ０００ ０１０ ０	１
３回戦（10月21日）７勝目	**法大**	**０１０ ０００ ０００**	**１**
（岡村）	**東大**	**０００ １００ ２０Ｘ**	**３**
４回戦（10月29日）９敗目	東大	０００ １００ １００	２
（岡村、樋爪）	法大	００２ ０１０ ００Ｘ	３



勝利整列後 悠々と引き上げてくる（２年生時：左から６人目）

五代、岡村がなぜ打てないか

秋の六大学野球・二人の魔術師

平凡さに盲点

げん惑される打者

打法に融通性を

日本ホールがい解す公

錬武館

昭和33年秋季リーグ戦終了時の特集記事